

日本語と英語におけるフォリナー・ レジスターの比較研究

大河原 眞美

1. 緒 言

どの社会でも、話し手が聞き手の言語能力が充分でないと判断して簡略化した言語を用いることがある。主なものは、幼児に対しての baby talk、障害者に対しての retarded talk、非母国語話者に対しての foreigner talk である。この中で、foreigner talk (FT) は、近年の Kraschen の Input Hypothesis¹⁾ と相まって盛んに研究されている。しかしながら、FT の研究はそのほとんどが英語に集中しており、日本語の FT の研究はまだ少ないのが実情である。

日本語の FT の研究として、スクータリデス (1981) の先駆者的研究がある。スクータリデス (1981, 1988) は、日本語の FT の概要を述べ、英語の FT との類似性、独自性に触れた。Onaha (1987) は、名詞句と助詞の省略は FT ではおこりにくいことについて述べた。Okawara & Sakamoto (印刷中) は、語彙分野に於ける FT では疑問詞、敬語の使用を抑え、代名詞、終助詞等を頻繁に使うと書いている。

本研究では、Arthur 他 (1980) の The Registers of Impersonal Discourses to Foreigners: Verbal Adjustments to Foreign Accent とい

1) Kraschen (1983) は、学習者が現在の言語能力より少し上のレベルの言語項目 (i+1) を含む入力言語を理解することによって、言語獲得が可能になると主張している。

う英語の FT の研究と Arthur 他 (1980) と同じ方法を用いて行なった日本語の FT の研究を比較考察する。

(1) foreigner talk (FT) と foreigner register (FR)

筆者は、これまで FT という用語を非母国語話者相手談話という広義で使用してきた。ここで狭義の FT と、FR の違いについて述べることにする。FT という用語は、Ferguson によって 1971 年に提唱された。Ferguson (1971:143) は、FT を a register of simplified speech used by speakers of a language to outsiders who are felt to have a very limited command of the language or no knowledge of it at all と定義づけている。さらに、Ferguson (1975) は、FT はその母国語話者が非母国語話者の話し方を模倣したものだと述べている。例として、定冠詞 the や be 動詞の省略や、no を not の代わりに使用すること等の英語の非文法的な用例を挙げている。

Arthur 他 (1980:112) は、Ferguson の非文法的な用例の FT を受けて文法的な用例として FR を打ち出し、FT と FR の違いを明確にした。FT はその言語のある構造を省略したり、又、その言語で使用しない構造をつけ加えた、元の言語に反する文法規則である。これに対して、FR はその母国語の文法に従っている言語目録の中で、語彙や文法やイディオムの使用を加減することである。簡潔に言うならば、FT はその言語では受け入れられない簡略化した非文法的な文法規則であるのに対し、FR はその言語で使用されているものの中で、母国語話者が非母国語話者にとって簡単だと判断したものを使用し、難解なもの避ける言語修正である。

(2) 仮説

Arthur 他 (1980:118, 123) は、英語の FR の研究で、アメリカ人は非母国語話者と話す時、複雑な文法を避け、内容を単純にし、母国語話者に対する時程親切な対応はしないと述べている。単純な文法を用いるのは別として、対応の不親切さというのは、英語の FR の特徴で、日本の FR の特徴は少し異なるのではないかと思う。筆者は 3 年の滞米経験から、ア

メリカ人は一般に、日本人と比べて外国人訛には興味がなく、むしろ否定的に受け止めているように感じた。一方、日本人は、外国人訛に好意的で、テレビのコマーシャルでは外国人訛の日本語や、その外国人の母国語すら出てくる。外国人訛が好きな国民とそうでない国民が各々の非母国語話者と接する時、双方共に単純な文法を用いていても、応対が変わり、与える情報も異なり、それらが FR の特徴にも影響を及ぼすと思う。そこで、筆者は、次に示す仮説をたて、Arthur 他 (1980) と同一の研究方法を用いて日本語の FR の研究結果を出し、英語と日本語の FR を比較してみることにした。

仮説一その国の外国人観も FR を決める一つの要因になる。

2. 研究方法

被験者は、航空会社に勤務する国内線、国際線の不特定の予約担当係である。6名の母国語話者と6名の非母国語話者が、こちらが準備した台本を用いて、1人それぞれ10回、予約係に飛行機の予約を電話で問い合わせた。本研究のデータは、「どんな飛行機ですか。」という曖昧な質問に対する予約係の答えと応対である。

英語の研究で、電話をかけた者は6名のアメリカ人母国語話者と6名の非母国語話者(韓国人2名、南米人2名、ベルシャ人2名)である。それぞれの国籍は男女同数である。日本語の研究では、6名の日本語母国語話者は高崎経済大学 II 9B の学生(男子3名、女子3名)で、6名の日本語非母国語話者は早稲田大学 G1 クラス(上級日本語)の学生である。非母国語話者の内訳は、韓国人(男子2名)、西独人(女子2名)、インドネシア人(女子1名)、アメリカ人(男子1名)である。早稲田大学の G1 クラスは14名のため、英語非母国語話者のように各国籍男女同数にできなかったが、日本語非母国語話者も全体数は男女同数である。

次のページの台本はこの FR の研究で使用した台本である。左側の英語の部分は Arthur 他 (1980) が使用したもので、右側の日本語の部分はそ

台 本

	英 語	日 本 語
1.	Hello. This is Mr. / Mrs. / Miss / Ms. _____. Can you please tell me if you have any planes going from ____ to ____ during the morning / afternoon / evening of June ____?	もしもし、予約の件でちょっとお尋ねします。____から____まで3月____日に便がありますか。
2.	予約係が便について話すまで会話を続ける。	
3.	What kind of plane is that?	それは、どんな飛行機ですか。
4.	予約係が飛行機について話す。(例えば、「747 です。」)	
5.	What kind of plane is a (747)?	(747) って、どんな飛行機ですか。
6.	予約係が答えるまで黙っている。	
7a.	予約係が質問をするまで待っている。それから、その質問に答える。あるいは、	
5b.	予約係が話し終わってから3秒おく。それから	
8.	丁寧に礼を言って電話を切る。	

の日本語訳である。ただ、日本語の台本では、変更が二箇所ある。一つは、1 の名乗りを省いたことである。アメリカは英語圏の国であっても、移民を積極的に受け入れてきたため、アングロサクソン系以外の名前が多い。しかし、日本の場合は日本人以外の名前は極めて少ないため、非母国語話者に名乗りをさせると、外国人訛を被験者に不必要に印象づけてしまうからである。もう一つは、英語の台本のように予約の問い合わせに朝・昼・晩を限定しなかった。これは、日本の国際線の場合、行先によっては週に一便ということもよくあるため、不自然さを避けるために省略した。

3. 研究結果と考察

(1) 電話のかけ主が母国語話者か否かを声から判定

本研究は、航空会社の予約係が電話のかけ主を母国語話者かあるいは非母国語話者であるかを判別出来なければならなくなる。そこで、英語の研究も日本語の研究も、電話のかけ主の声を別のそれぞれの母国語話者によって判定してもらった。英語の方は母国語話者は98.8%、非母国語話者は97.6%で聞きわけられ、日本語の方は母国語話者は96.6%、非母国語話者は99.3%の率で聞きわけられた。

さらに、外国人訛、流暢性、堅苦しさ、親近感、知性、教養、自信、文法の正確さについて意味微分²⁾ (semantic differential) を用いて判定した。その結果、英語も日本語も非母国語話者は母国語話者に比べて訛があり、文法の不正確さが目立ち、流暢性に欠け、自信も欠如しているという数値が得られた。英語の研究では、知性、教養に関しては非母国語話者、母国語話者の間では差がないが、親近感においては非母国語話者は劣るという数値が出た。一方、日本語の研究では非母国語話者、母国語話者間では堅苦しさ、親近感、教養の面では差がないが、非母国語話者の方はやや知性に劣るという結果が出た。

(2) 予約係の応対一型式の分析

予約係の応対を、長短、文法難易度、流暢性、冗漫性、語彙密度、速度の六つの特性で分析した。長短は、総語数とT単位数³⁾で計った。文法難易度は、1T単位における語数、従属節数⁴⁾、同格語数⁵⁾で表した。流

2) 「ロングマン応用言語学用語辞典」によると、意味微分は語についての人の態度や感情を測定する一つの技術で評定尺度(両極的形容詞、例 good...bad)を用いる。

3) 「ロングマン応用言語学用語辞典」によると、T単位は文が分割される最小の単位で、一つの独立節とこれに付加されるあらゆる種類の従属節からなる。

4) T単位の長さで従属節の数が比例することが多いので、長いT単位は文法的に複雑とみなされている。

5) 「ロングマン応用言語学用語辞典」によると、同格は文中の二つの語、句、節が同一の指示を有する事である。英語の同格語例として、Arthur 他(1980)は、「It's a jet, a big plane.」を挙げている。日本語の同格語例としては、「ジェット機、大きい飛行機です。」になる。Middlebury Elementary Japanese によると、「X という Y」も同格語であるので、本研究では「X という Y」も同格語として扱った。

表 1 予約係の応対の分析(平均値)

	英 語		日 本 語	
	非母国語話者	母国語話者	非母国語話者	母国語話者
長 短				
総 語 数	165.17	273.67	16.36	26.6
T 単 位 数	23.83	30.83	2.93	3.5
文法難易度				
1 T 単位における語数	6.98	8.85	5.38	7.49
1 T 単位における従属節数	0.14	0.22	0.05	0.17
1 T 単位における同格語数	0.20	0.13	0.07	0.14
流 暢 性				
100 語における false start 数	2.20	3.00	0.34	0.76
100 語における埋められた休止数	2.42	4.71	7.90	7.84
100 語における無言休止数	5.34	3.40	1.81	1.50
冗 漫 性				
100 の情報における重複した情報数	15.17	11.73	8.47	3.31
語 彙 密 度				
総語数における異なる語の数	3.69	4.69	1.96	2.58
速 度				
1 分間あたりの平均語数	130.27	138.83	130.34	162.90

暢性は、100 語における false start 数⁶⁾、埋められた休止数⁷⁾、無言休止数⁸⁾で示した。冗漫性は、100 の情報 (information bit) における重複した

6) Clark & Clark (1977: 262) は、false start を correction of a word と定義している。例として、「...no one yet has done the / in a way...」の「/」で印をつけ言い替えた箇所である。日本語の false start の例は、「あのう、機種 of / 機種についての...」の「機種 of」を「機種に」言い替えた箇所である。

7) 埋められた休止は、英語の場合は「um, er, mm」等で、日本語の場合は、「ええ、ああ、あのう」等の表現によって埋められた途切れのことを言う。ただ、Arthur 他 (1980) の研究は、schwa (曖昧母音) として「er」だけを扱っている。

8) 「ロングマン応用言語学用語辞典」によると、無言休止は語と語の間の無言の途切れのことである。

情報数の比率で出した。語彙密度⁹⁾は、総語数に対して異なった語が占める比率で出した。速度は、1分間あたりの平均語数で表した。

(a) 長 短

英語と日本語を比較してみると、総語数、T 単位数共に、英語は日本語の 10 倍になっている。本研究は、Arthur 他と筆者の共同研究でないため、筆者の Arthur 他の研究方法の解釈に不充分さがあったものと思われる。よって、ここでは日本語と英語の全体の比較でなく、日本語と英語の各々の母国語話者と非母国語話者の相違に焦点をあてて述べる。

日本語も英語も、予約係は母国語話者に非母国語話者より多くの語数を使った。T 単位数では、母国語話者と非母国語話者の差はそれほど顕著でない。すなわち、日本人の予約係もアメリカ人の予約係も、母国語話者に長文を非母国語話者には短文を使用したことになる。

日本語と英語は、対応の声の調子で異なる。英語では、非母国語話者の声を聞くや否や不親切な対応をしたり、中には切符を買うか否かを聞かずに電話を切る者すらいた。

Arthur 他 (1980:118) は、非母国語話者に対する短い対応の一因として、アメリカ人予約係の非母国語話者に対する拒絶の態度を考えている。一方、日本人の予約係は非母国語話者には好意的に対応した。曖昧な質問を受けて答に窮しても、それが非母国語話者からの質問なら、相手が求めていそうな答を捜す傾向があった。しかし、母国語話者に対しては、質問が不適當だということで冷淡な態度をとる者がいた。日本語の場合、予約係の非母国語話者に対する短い対応は必ずしも拒絶の態度から発しているのではない。

(b) 文法難易度

日本語でも英語でも、予約係は母国語話者に非母国語話者より、長くか

9) 「ロングマン応用言語学用語辞典」によると、語彙密度はタイプ・トークンの比率のことで、文章やテキストの難しさの尺度として使われる。

$$\text{語彙密度} = \frac{\text{それぞれ異なる語の数}}{\text{テキストの総語数}} \times 100$$

つ従属節の多い文を使用したことになる。日本人の予約係は母国語話者に多くの同格語を使い、アメリカ人の予約係は非母国語話者に多くの同格語を使っている。これは、日本語の同格には「X という Y」の形も含まれていて、複雑な説明になりうることもあるため、日本人の予約係が使用を控えたようだ。

(c) 流暢性

Arthur 他 (1980:118) は、false start の使用を控えることは大人の FR の特徴だと推測している。英語の数値は顕著でないが、日本語の数値は Arthur 他 (1980) のこの見解を支持している。

埋められた休止は、話し手が話をまだ続ける合図として用いられる。これに対して、無言休止は、話し手が聞き手に話を始めるように促す合図として使用される。英語では、予約係は母国語話者に対してより多くの埋められた休止を用い、非母国語話者に対して多くの無言休止を使っている。この数値から、Arthur 他 (1980:119) は、アメリカ人の予約係は、母国語話者と話す時は十分な説明をしたいため自分の話をまだ続ける合図として埋められた休止を使い、非母国語話者と話す時は説明を早く終わらせたり、非母国語話者が理解しているかを確認するために無言休止を使ったようだと言っている。

日本語の場合、埋められた休止と無言休止における母国語話者と非母国語話者の数値は余り違わない。ただ、日本人の予約係は、母国語話者が「どんな飛行機ですか。」の質問をした時に、埋められた休止と無言休止を頻繁に使用した。非母国語話者に対しては、この双方の休止を談話全体で比較的満遍無く使用している。日本人の予約係は、母国語話者が曖昧な質問をすると、当惑して埋められた休止を用いて適切な答を捜し、無言休止を用いて母国語話者にもう少し具体的に質問するように求めたようである。つまり、日本人の予約係は、アメリカ人の予約係のように母国語話者に対して長々と説明して非母国語話者に対して説明を控えるようなことはしていない。

表 2 予約係の対応の内容

英 語		日 本 語	
情 報	電話 10 回ごとの平均値	情 報	電話 10 回ごとの平均値
大きさ	8.75	機 種	9.02
機 種	8.42	質 問	8.20
その他の情報	5.25	発 着	2.62
座席数	3.25	便 名	2.46
質 問	2.92	製造会社	1.80
他社の航空機との比較	2.83	経 由	1.64
製造会社	2.83	直行便か否か	0.98
知らない	2.83	座席数	0.66
エンジンの数と位置	2.50	大きさ	0.35
座席配置	1.00	使用会社	0.33
		他社の航空機との比較	0.31
		説明をやめる	0.16

(d) 冗 漫 性

日本語でも英語でも、非母国語話者は母国語話者より多くの重複した情報を受けている。

(e) 語 彙 密 度

日本語でも英語でも、母国語話者は非母国語話者より多くの種類の語彙に接している。

(f) 速 度

日本人の予約係もアメリカ人の予約係も、非母国語話者に対して速度を落として話している。日本人の予約係の速度の落とし方の方がアメリカ人より顕著である。

(3) 予約係の対応—内容

表 2 は、予約係の対応の内容を情報 (information bit) 別に分類して、頻度順に並べたものである。

日本語と英語では、予約係の与えた情報の内容と頻度が随分異なっている。第 1 に、日本語の情報の種類が多い。これは、英語で「その他の情

表 3 予約係の対応のタイプとその比率

	英 語		日 本 語	
	非母国語話者	母国語話者	非母国語話者	母国語話者
総情報数	28.17	41.67	24.72	33.60
総 T 単位 (%)				
単 純 情 報	49.93	37.77	35.96	29.76
複 雑 情 報	21.86	37.58	10.11	9.52
質 問 情 報	28.21	24.65	22.47	33.33
その他の情報			30.34	27.38
第 1 T 単位 (%)				
単 純 情 報	65.21	40.23	33.93	32.26
複 雑 情 報	25.26	45.41	5.36	3.23
質 問 情 報	9.54	14.37	14.29	32.26
その他の情報			46.43	32.26
残余 T 単位 (%)				
単 純 情 報	39.44	36.07	39.39	28.30
複 雑 情 報	15.09	33.48	18.18	13.21
質 問 情 報	45.47	30.45	36.36	33.96
その他の情報			6.07	24.53

報」として一まとめにできた情報群が、日本語の方では数値が高く一まとめにできないため、「その他の情報」を一つずつ情報として扱ったからである。第 2 に、英語では余り現われなかった、「その質問はどういう意味か」と質問をし返す「質問」が、日本語では非常に多く出ている。共通点としては、双方で「機種」についての数値が高いことである。全体として、アメリカ人の予約係は飛行機の物体について情報を与えたのに対し、日本人の予約係は飛行機の便についての情報を提供した。

表 3 は、予約係が与えた情報のタイプと比率を母国語話者と非母国語話者で比較したものである。

総情報数は、母国語話者と非母国語話者が受けた情報の総数を一人あたりの平均で示したものである。アメリカ人の予約係は非母国語話者に 28

の情報を、母国語話者には 42 近くの情報を与えた。日本人の予約係は非母国語話者に 25 近くの情報、母国語話者には 34 近く与えた。いずれの場合も、母国語話者は非母国語話者より多くの情報を得たことになる。

Arthur 他 (1980:121) は、情報を「単純情報」と「複雑情報」に二分して、予約係の対応のタイプとして分析している。「単純情報」は「大きさ」と「機種」で、「複雑情報」は「座席数」、「他者の航空機との比較」、「製造会社」、「エンジンの数と位置」、「座席配置」である。しかし、日本語では、Arthur 他 (1980) の「単純情報」、「複雑情報」に該当しない飛行便に関する情報や「質問」の情報も多いので、飛行便に関する情報を中心に扱う「その他の情報」と「質問情報」を新たに設けて、情報のタイプを四分した。

表 3 の「総 T 単位」は、「どんな飛行機ですか。」に対する予約係の対応に現れた全ての T 単位を指す。「第 1 T 単位」はその対応の中の一歩最初の T 単位を示し、「残余 T 単位」は「第 1 T 単位」を除いた残りの全ての T 単位を示す。各々情報の数字は、その範囲(総 T 単位等)における比率を % で表した。英語では「質問情報」、「その他の情報」の考察がないので、これら二つの情報の合計を比率で示すのみにとどまった。

アメリカ人の予約係は、母国語話者には非母国語話者より多くの「複雑情報」を与えている。特に、「第 1 T 単位」では、母国語話者には「複雑情報」、非母国語話者には「単純情報」が多い。「残余 T 単位」においても、非母国語話者に対する複雑情報の比率は少ない。このことから、非母国語話者が「それはどんな飛行機ですか。」と最初の質問をすると、予約係は「単純情報」を与え、非母国語話者が「単純情報」の答に満足せず、「～って、どんな飛行機ですか。」と再質問をしても、「複雑情報」を与えない傾向があることがわかる。Arthur 他 (1980:121) は、アメリカ人の予約係は、母国語話者は飛行機についての知識があるが、非母国語話者にはないと考えているからだと述べている。さらに、このようなアメリカ人の予約係の対応は、外国人と話す時は話を手短かに簡潔にするという一

般に行なわれている外国人対応術の影響だとつけ加えている。

日本人の予約係は、非母国語話者にも母国語話者にも「複雑情報」は余り与えていない。これは前に述べたように、日本人の予約係は、「どんな飛行機ですか。」という質問に対しては、飛行機の物體的な説明より飛行便についての説明を求めていると推測したからだろう。

「第1T単位」では、日本人の予約係は母国語話者に32%もの「質問情報」を与えているのに、非母国語話者に対しては14%しかない。「残余T単位」になると、非母国語話者に向けられた「質問情報」は36%と増えている。しかし、「単純情報」も39%に増加しているので、「質問情報」が最多情報ではない。母国語話者が「それはどんな飛行機ですか。」と最初の質問をすると、予約係は随分曖昧な質問だと思い、質問をし返すことが多い。ところが、非母国語話者が同じ曖昧な質問をすると、予約係は単に質問を返すのではなく、相手が望んでいそうな答を捜す努力をしているようだ。さらに、非母国語話者が、「～って、どんな飛行機ですか。」と質問すると、予約係は非母国語話者に対しても質問を返す（「質問情報」）ことが多くなる。しかし、それでも「単純情報」の方をより多く与える傾向がある。予約係の非母国語話者に対する応対には、外国語で話す不自由さへの同情があり、母国語話者に対する応対には、いたずら電話ではないかと迷惑がっている様子があった。この非母国語話者に対する同情的な応対は、外国語の使用にまで発展している。予約係が「ロッキード」と言ったのを、日本語非母国語話者の西独人が二度も「rock speed」と聞き違えた。その直後、予約係は、「Are you interested in business class...」と英語で話し始めた。アメリカ人の予約係と違って、日本人の予約係にはある程度の外国語（英語）の能力が要求されている。その上、アメリカにいる人間は外国人であっても英語を話すべしというアメリカ人の考え方を、日本語にあてはめる日本人は窮めて少ない。むしろ、大多数の日本人は、今だに外国人が日本語を話すと驚く始末である。このような日本人の母国語に対する非母国語話者への期待度の薄さが、英語と異なった数値を出した原

因の一つと思われる。

Okawara & Sakamoto (印刷中) は、日本語の FR では敬語の使用を控えるようだと述べた。本研究でも、日本人の予約係は非母国語話者には敬語を余り使わなかった。敬語は難しいと考えたためか、或は、流暢性に欠ける日本語のため子供扱いしたのか、この原因は今後の研究を待たねばならない。

4. 結 論

航空会社の予約係の対応での日本語と英語の共通点は、非母国語話者には文法的に単純で短い文を使う傾向があったことである。相違点は、アメリカ人の予約係は非母国語話者には母国語話者ほど丁寧に説明しなかったのに対して、日本人の予約係は非母国語話者には母国語話者より充分に説明したことである。この相違は、両国民の各々の母国語に対する非母国語話者の期待度の違いからくるものと思われる。アメリカ人は、アメリカにいた人間は全て英語を話すべしと考えているのに、日本人は、日本語は難しいから日本人にしか話せないと考えているからだ。よって、その国の人間の外国人観も FR の特徴を決定する一つの要因だと考える。

付 記

本稿は昭和 63 年 9 月 23 日、第 27 回大学英語教育学会全国大会で行なった「A Contrast of Foreigner Registers between Japanese and English」と題する発表の草稿に基づいて書いたものである。

参 考 文 献

- Arthur, Bradford., Richard, Weiner., Michael Culver., Young Ja Lee., and Dorina, Thomas. 1980. The register of impersonal discourse to foreigners: verbal adjustments to foreign accent. In Diane Larsen-Freeman (ed.). *Discourse Analysis in Second Language Research*. 111-124. Newbury House.
- Clark, Herbert H. and Eve V. Clark. 1977. *Psychology and Language*. Harcourt Brace Jonanovich, Inc.
- Ferguson, Charles A. 1971. Absence of copula and the notion of simplic-

- ity: a study of normal speech, baby talk, foreigner talk, and pidgins. In D. Hymes (ed.). *Pidginization and Creolization of Language*. 141-150. Cambridge University Press.
- . 1975. Toward a characterization of English foreigner talk. *Anthropological Linguistics* 17:1-14.
- Kraschen, Stephen D. 1983. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Pergamon Institute of English.
- Middlebury Elementary Japanese: Grammar & Index (Lesson) 1-10 (of 20 Lessons). Preliminary Draft.
- Okawara, Mami Hiraike & Tadashi Sakamoto. (印刷中) The Japanese foreigner register with regard to vocabulary. In Wesley M. Jacobsen & Osamu Kamata (eds.). *Teaching and Learning Japanese: In Honor of Seiichi Makino*. Michigan University Press.
- Onaha, Hiroko. 1987. Foreigner talk in Japanese: a comparison of ellipsis of particles and noun phrases between foreigner talk and speech to native speakers. *JACET Bulletin* 18:89-108.
- スクーターリデス, アリーナ 1981 「日本語におけるフォリナー・トーク」 *日本語教育* 45号, p. 53-62.
- . 1988. 「日本人が外国人と話す時」 *国文学—解釈と鑑賞* 第53巻1号 p. 118-124. 至文堂
- ロングマン応用言語学用語辞典 1988. Richard, Jack, John Platt, Heidi Weber (編), 山崎真稔, 高橋貞雄, 佐藤久美子, 日野信行(訳), 南雲堂